34th Annual Meeting of Cervical Spine Research Society —European Section に参加して

整形外科学教室　大学院４年　羽山　祥生（平成 22 年入局）

2018 年５月９日から11 日までポルトガルのリスボンで開催された34th CSRS-ES に参加してきました。昨年、私自身発表はありませんでしたがザルツブルグで開催された本学会に参加させて頂きました。その時に多くの日本の先生方が堂々と世界を相手に発表しており、さらに当教室の中矢先生が頚椎椎弓形成術術後の超音波検査の有用性を報告し、Mario Boni Award（Poster 部門）を受賞し、とても刺激的で興奮した学会でありました。

私はその超音波の研究を引き継いで行なっており、今回「Clinical significance of the decompression status of the spinal cord observed by the percutaneous ultrasonography after cervical laminoplasty」という演題で発表しました。昨年受賞演題の継続研究でもあり、本演題も興味を持って頂けたようで、幸運にもMario Boni Award（Oral 部門）にノミネートして頂くことができました。昨年とても遠い世界に感じていたあの舞台に自分が立つと考えると出発前から落ち着かなく、恥ずかしくない発表ができるように脊椎班の先生方に協力して頂きながら準備を進めました。

昨年は４人の参加（演題は１演題）でしたが、今年は私の他にも、中野先生、中矢先生、矢野先生が発表参加され、宇佐美先生、大保先生が聴講参加されました。またノミネートされたこともあり、参加予定のなかった根尾教授も急遽来て頂ける事になりました。またボルドーでの留学を終え、まさに同時期に帰国予定であった藤城先生も予定を変更し駆けつけて頂けることとなり、当教室から計８人での参加となりました。

我々は学会３日前にリスボンに着き、市内や郊外へ足を伸ばしシントラ観光などを楽しみました。夜は昨年同様、発表前夜までは皆で１室に集まり、私のプレゼンテーションの練習に付き合って頂きました。その成果もあってか、発表はとても緊張しましたがなんとか無事に終えることができました。しかし、質疑応答では最初の質問に対し見当違いの返事をしてしまい、その後も満足のいく応答ができないまま終わってしまいました。結果、案の定？ アワード受賞とはなりませんでした。研究内容では他のノミネート演題に負けていないつもりでしたので、自身の英語力やプレゼンテーション力のなさに、とても悔しい思いをしました。しかし、懇親会や学会

リスボンの街並み

プレゼンテーションをする私

の合間に沢山の他大学の先生方に声をかけて頂き、我々の研究の方向性は間違っておらず、面白い研究をしているんだという自信にもなり、今後の励みになりました。

予定を変更してまで応援に来てくださった根尾教授、ノミネートが発表された時から、スライド作りや質疑応答対策など熱心にご指導頂きました中矢先生を始めとした脊椎班の先生方にはこの場を借りて御礼を申し上げます。昨年の興奮を皆で味わいたかったのですが、今年は私の力不足で叶いませんでした。もう一度あの舞台に立ち、今度こそ！という思いを持ちながら、今後も継続して国際学会で発表できるような研究ができるように、さらに精進していきたいと思います。今後ともよろしくお願いいたします。

発表を終え皆で集合写真

発表を終え観光

サン・ジョルジェ城の夕景

リスボンでの一夜